

# 二十一世紀に伝える河川



理事長 松田 芳夫

今年1997年。あとわずか4年で21世紀に突入するという文字通りの世紀末である。高齢化社会の到来を間近に控えながら、経済も思わしくなく、政治、社会、国際情勢もゆれ動き、将来への不安も胸をよぎるこの頃である。

このような時代に我々が河川に対しどのような想いを託し、我々の子孫にどのような河川の姿を残そうとするのか、立ち停って考え、改めて信念を持って対処していきたいものである。

国や都道府県の手になる治水と利水がその活動の殆ど全てであった河川改修の疾風怒濤の時代から、河川の水質、自然環境、景観などの価値観が河川管理にも反映されるようになって約20年の歳月が経過し、リバーフロントいわゆる河川の水辺の望ましい姿の整備を目的としてリバーフロント整備センターが設立されてから今年で十年目を迎える。

センター設立以来のこの十年間に行政側の対応も著しく変化して来たとし、市民の河川への関心や期待も多種多様なが声が大きくなり、生態の観点からの自然環境の保全や回復への運動も盛んになって来た。

河川沿いに空地があればそこに河川の風景を引きだてるように植樹する、市街地前面の河川の高水敷を公園として整備する、荒れた水辺を本来の自然豊かなビオトープとして復元する、取水堰などの構造物に魚道を設置し魚がのびやすいようにする等の動きが、全国各地で見られるようになった。

しかしながら、その反面、河川の本質を忘れた行為とその作品が目につくことも多いのは残念なことである。

例えば、東京の隅田川沿いのわが国で最初の本格的な河畔公園であり、関東大震災の復興事業として河川敷を利用するとともに一部水面も埋立てて造られた「隅田公園」は、川風を楽しみながら散歩が出来、春には桜の名所となる秀れた公園であったが、第2次大戦後、体育館、室内プール、テニスコート、野球場が設けられ、水質悪化を理由に公園内の入江は暗渠化され、オリンピックを契機に高速道路が園内を貫通し、コンクリート高潮堤が水辺との縁を切るなど雑然として細長いだけのつまらない公園になってしまった。

又、市街地を流れる河川の高水敷を公園に整備した近年の事例では、高齢者用にかカラーブロックを敷きつめた散歩道、

レンガで縁どりされた長四角の花壇、子供用の遊び場としてブランコと砂場とコンクリート造の亀の置き物、河岸には水際まで降りられる階段護岸そして流れを渡って左右両岸を結ぶ飛び石等々、要するに普通の都市公園を川の中に持ってきただけというのをよく見かける。水車と石灯籠と錦鯉という日本庭園風のものもある。

これでは、何も河川でなくても構わないものをそこに土地、空間があるからというだけの理由で河川へ持ってきたという便宜主義と言われても仕方がない。

日本の河川は（独り日本に限らないが）、自然の営力が生み出した地形の上に、稲作が始まってから2000年以上にわたる私たちの祖先の活動がくり広げられて出来た、いわば自然と人間との共同作品である。ここ100年くらい内務省や建設省が手をかけたからといって2000年の歴史の積み上げには及ぶべくもない。

人間が自分の都合のみで自然の摂理に反した行為をすれば自然からしっぺ返しがあるし、自然がその本来の性向のおもむくまま人間界に侵入してくれば、人間の知恵の限りを尽くした反撃がある。川を埋立てそのテリトリーを犯せばいつか洪水があふれ、川が勝手気ままに氾濫原を暴れて農地や都市を荒らせば、人間は重機械、鉄、コンクリート等、持てるすべての資源を動員して川をもとの領域に閉じ込めようとする。河川には百パーセントの自然も無ければ百パーセントの人工も無いのである。

このように河川は人間の長年の努力の集積によって造り出されたかけ替えのない貴重な空間であるとも言えるのであり、ある特定の時代の人々の目先の価値観のみで便利使いせず、河川でなければ出来ないような類の営為に用いるべきものと思う。

河川は空地ではない。一見、空地に見えるかも知れないが、目を凝らせば水の流れ、動植物の存在、川風のいぶき、時には往き来する船やボートに気付くはずだ。何よりも大河は大河なりに小川は小川なりに我々の視線をおだやかに受けとめてくれる広がりがある。

河川を人類の文明の利便の為に利用することは当然としても、それと同時にそれぞれの河川の固有の価値をより発展させるような使い方と整備をするよう、今の私たちは努力していく責務を負っているのである。